

学生の多様化と大学教育（2）

前号では、「学生の多様化と大学教育」というテーマを、教育する側にポジショニングして考察した。本号では、学生の側にポジショニングした大学教育について考察する。

バブル経済の崩壊をきっかけに、日本の労働雇用システムは一気に個性化した。伝統的な労働雇用システムがなくなったわけではないが、それもいろいろな可能性のあるなかで取り得る一つの選択技となった。加えて、ひと昔前ほど将来の雇用が保障されなくなっているし、流動化も進んでいる。こうして学生は、労働雇用に関するさまざまな選択肢のなかから自分に合うものを選び、その結果に自己責任を負わねばならなくなっている。大学でしっかり勉強することがいかにどのものであるかわからなくても、のんきに遊びほうけている気分にはなれない。これが、現代大学生が大学で勉強せざるを得なくなっているダイナミクスである。

だからと言って、直接仕事につながる勉強をしようなどとひとたび思うと、大学で力強く勉強することはできなくなる。直接仕事につながることの少ないカリキュラムや授業内容を、どう自分のものにして勉強するかが、学生個人に求められている。

仕事に直結する専門分野にいる者にとっても、それだけで力強く勉強していくことはできない。その学習内容のなかには、将来どのように役立つかが見えない基礎的な学習がたくさんあるからである。また、いろいろなことをしたい、しなければならぬ忙しい大学生活のなかで、勉強を忍耐強く続けることも難しい。こうして結局は、仕事に直結しようと好きであろうと、そうでなくても、与えられる課題を自分が発展するようにこなしていくさまざまな能力や態度が求められることになる。

学生の大学生活への適応研究を1980年代以前と2000年以降とを比較すると、1980年代以前の研究では、高校時代における大学や学部の進路選択、第一志望か不本意入学か、そんなことばかりが検討されている。それに対して2000年以降の研究では、入学時の要因よりもむしろ、大学時代に将来展望を持っているか、どのような種類の対人関係を形成しているか、自己をマネジメントしているか、といった個人的資質要因が多く検討されている。第一志望や不本意入学といった要因が検討されていないわけではないが、現在ではそれらに加えて、将来を展望して現在の大学生活を自覚的にマネジメントする個人的資質が、大学生活への適応をより規定すると考えられている。

しかし、人生を展望することと、それを日常につなげることはかなり難しい。実際、多くの学生はこの点においてかなり苦戦している。何人かのキャリア教育の担当者から、「人生が見えてきた学生は勉強するようになる」と聞いたことがある。しかし、その勉強の中身を聞いていくと、語学の勉強や留学すること、授業にまじめに出ることであったりする。仕事に直結することだけを学習する姿勢だ。私はそうしたことを否定しないが、それでは自分を発展させる勉強が弱いと

溝上 慎一

(京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)
(比治山大学高等教育研究所客員研究員)



感じる。

業種や企業規模によっても違うが、30代前半くらいまでの仕事はマニュアルのある仕事であることが多い。しかし、そのマニュアルのある仕事をこなすなかに、個人的資質がかいま見える。自分で問題意識をもって仕事をする人、そうでない人とは、問題やトラブルへの敏感さ、対処法において雲泥の差がある。問題は、その問題意識がどうやって形成されるかである。この議論が大学教育やキャリア教育で決定的に欠けている。加えて、企画やマネジメントの部署に配属されると、仕事内容は一気にマニュアルを離れ、一見会社や仕事に無関係に見えるところにジャンプする思考ができるか、そうした知識やアイデアを持っているかが問われる。ひと味違う個人的な資質、問題意識はいつそう顕著に求められる。

自己の能力や知識を発展させるためには課題が必要である。乱暴な言い方をすれば、それはどんな課題でもいい。しかし、現代社会の多様さ、複雑さを考慮して、より体系的で抽象的なテーマを課題とする方がいい。個別具体の生産・販売・管理をおこなう企業においてさえ、その会社のポリシー、発展、社会のなかでの位置づけなどを考える際の課題はかなり体系的で抽象的である。そうした種類の課題が課されるのが大学ではないか、と私は考える。授業やゼミで課されるさまざまな課題を前にして、学生の資質は二分する。課題に興味を示す、もっと調べてみようと思う、さまざまな本を読もうとする、意見を異にする他の学生と議論しようと思う、良いプレゼンテーションをしようと思う、そういったことの1つ1つの積み重ねが将来の個人的資質にじわじわと効いてくる。クラブ・サークル・アルバイトでのコミュニケーションが大事だと昔ながらの感覚で言う人がいて、アホかと思うことがある。現代で求められているのは、そんな経験知で議論できるようなコミュニケーション能力ではない。自分の知らない知識、遠い世界をテーマに、さまざまな分野の人たちと議論していく、そのようなコミュニケーション能力である。もちろん、挨拶や雑談もできないようなら、話は深刻である。しかし、大学教育はそれも含めてもっと上を目指さなければならない。より高度な教育効果と学生の自覚的な世界観とのマッチングが焦眉の課題である。